ようこそ校長室へ！

No. ３
令和５年４月２０日
発行 ： 貝 塚　敦

に	にこにこ笑顔で	い	いつもみんなで	つ	紡ぎ繋げる心で	に	日本一をめざすのだ

母がくれる玉手箱

県外出身の自分が東京の大学進学のために実家を出てから、かれこれ４０年近くの年月が経過しました。新潟に居を構えて３０年、実家とは隣町に行くように往来できる距離ではありませんので、この頃は、年に１、２度の帰郷に限られます。父は既に他界し、８０代半ばの母への顔見せが主たる目的の里帰り。

年老いた母は、足腰や耳や眼はかなり弱ったもののの口だけは達者で、私が生家に着くなり、昔話や近隣の人や景色の移り変わり、ご近所・親類縁者の噂話や悪口、同居家族や外孫・ひ孫の話題など、まさに機関銃の如く一方的にまくしたて、同じ内容を何度も何度もリピートする始末。年々その傾向は激しさを増すばかりです。

私は、毎度毎度同じ話を聞くことに辟易し、生返事と相槌を繰り返し、馬耳東風を決め込むのが常です。ところが、帰郷の度に、そのよもやま話の途中で母親から発せられる「おまえの小学校の同級生のＹ君、今でも幸せに暮らしているよ。」という言葉を耳にした瞬間だけは、決して無視することのできない大きな衝動を覚え、すぐさま小学校５年生にタイムトリップすることになるのです。

※ ※

転校生のＹ。

時は高度経済成長時代。極めて保守的・牧歌的な田舎の村の全校児童１３０名余りの小学校にとって、転校生自体珍しいものでしたが、Ｙの登場は、静まり帰った池の水面に岩が投げ落とされたごとき、まさに大きな波紋をもたらすものでした。

彼は、父親と幼い妹の３人で、遠い親戚を頼ってわが村に引っ越してきました。住居は物置小屋と見間違えるほどの小さなバッラク造りで、彼の身なりや持ち物からも、彼の家庭がかなり経済的に困窮していることが、子どもなりに容易に想像できました。

父親は、春の運動会で、泥酔しながら上半身裸で運動会のグラウンドに現れ、進行席のマイクを取り上げ意味不明な言葉を連発。その場に居合わせたすべての人間が唖然としたものです。彼の二の腕から背中には見事な“彫り物”がほどこされ、一目で　“ただ者ではない”ということもすぐわかりました。その時自分の隣にいたＹの顔は、トマトのように真っ赤に変色し、彼のナイフのような鋭い目つきのまま硬直した姿は、今でも脳裏にはっきりと焼き付いています。

彼自身も、窃盗や万引きを繰り返し度々警察のお世話になり、女の子や弱い者に嫌なことを言ったりしたりすることも多々ある、いわゆる問題児でした。おのずと、周囲の雑音は日増しに大きくなっていきます。

「あんな子とは絶対につきあうな。」「あの家族に関わるな。」と。親や地域の者たちは、一斉に自分の子や地域の人間に言い聞かせるように叫び始めたのです。

我が母親の話は続きます。「あの時な、あの子と仲良くしているお前のことが私もちょっと心配になって、『どうしてあの子とつきあってるんだ？』ってお前に聞いたら、『俺、Ｙの奴やあいつの親父が、みんなが言うほど悪い人間には思えないんだ。いいところだっていっぱいあるよ。』って言ったんだよ。我が子ながら感心したよ。」

当時も今も、自分は正義感が強く品行方正な人間だとは決して思いません。当時の彼の境遇に深い同情を抱いたわけでもありません。ただ、担任の先生から事前に「今度来る転校生の面倒をみてやってくれ。」と直々に頼まれていたので、“先生から頭下げて頼まれたからには”と子どもながらに意気に感じたことと、新参者に先輩風をふかしていいかっこを見せたかっただけのことなのです。自分に子分ができたような気分を喜んでいたのかもしれません。ただ、彼とつるんでいることは、全く嫌でも苦でもありませんでした。

田舎の典型的なガキ大将で、クラス内でもそれなりの存在感や発言力があり、上級生にも下級生にもある程度顔が利く自分が、Ｙのことを積極的に誘って一緒に遊んだりいたずらをしたりしているうちに、クラスや学校での彼自身の居場所が少しずつ出てきて、周囲からも徐々に受け入れられるようになってきたのは事実です。そして、彼自身もいい方向に変容していったような気がします。そして、知らず知らずに、周囲の彼や彼の家族に対する態度や偏見も和らいでいきました。

自分や自分の周囲とは明らかに何かが違う彼と、彼の登場がもたらした周囲のとまどいやざわめき、そして数々の人間模様を、私はこの時にたくさん感じ取ることができました。学校にも社会にも、いろいろな人がいる、様々な考えの人がいる、差別や偏見もある。そう初めてはっきりと自覚できた時だったのかもしれません。

教師になって様々な子どもと出会いました。生育歴やその子を取り巻く環境は、もちろんその子の成長にとって無視することのできない大きな要素です。そして、様々な人との出会いが互いの人間形成にもたらす影響は計り知れないものです。

でも、**はじめから悪くなろうと思って生まれてきた子なんて一人もいないはずです。また、はじめから悪意の塊で人に迷惑をかけることや人が嫌がることをする子や、失敗や愚かな行為を犯す子もいないはずです。その子を取り巻くあらゆる環境や要因がその子を形成し、その子の行為や言動には必ずやその原因となる理由や背景が存在しているはず**なのです。

学級や学校にはいろいろな子がいます。自分と相性の悪い相手もいれば、価値観の正反対の子も反りが合わない人間もいるはずです。しかし、人との出会いとは、目の前の損得や打算で成り立つものであってはなりません。教科書やタブレットよりも、生身の人間こそ、我々に与えられた最高・最大の教材・教具と受け止めるべきです。

いろんな人間がいて、いろんな見方や考え方をする人間がいて、だれとでも公正・公平に接する努力をし、互いを理解するように努めること、そして、認め合い・助け合い・期待をかけ合い・高め合うところ。それが教室であり学校なのです。

※ ※

小学校を卒業し同じ中学校に進んで別のクラスになってから、特にＹと親しくつき合うことは自然になくなりました。また、これまで数少ない同窓会の機会もありましたが、再会することもありませんでした。ただ、Ｙが、我々の同級生の妹と結婚して、周囲に羨ましがられるほど幸せな家庭を築いていることは、風の噂で聞いていました。そんな彼と今後も一生会うことはないかもしれません。

「おまえの小学校の同級生のＹ君、今でも幸せに暮らしているよ。」これが、私が里帰りするたびに、母が私に与えてくれる大切な大切な玉手箱。この玉手箱を開ける度に、なぜか懐かしく清々しい気持ちに覆われ、新たな勇気と元気が湧いてきます。

母齢（よわい）８６歳。この玉手箱を母からもらえる回数も、残りわずかかもしれません。小さな片田舎の実家での静寂に包まれた夜、一人布団にくるまりながら、遠い日の懐かしい少年時代の思い出を胸に、最愛なる母の長寿を願い、いつもなぜか目頭が熱くなる、これが我が帰郷の夢一夜なのです。